校長室だより～燦燦～ №９７０

# 出版

2024.2.12

出版社からの文面を読んでいった。「弊社からの出版に際しましては、書店での販売を前提としておりますので、一般流通書籍としての適否（公共性）を審査いたします。」多少緊張が走った。「お寄せいただいた御著作に関しましては、原稿審査担当部署にて丁重に拝読した結果、弊社から刊行（全国流通）していただける内容であると判断されましたことを、ご報告申し上げます。御著作と未知の読者との出会いの場をご提供できますことを担当者として嬉しく思っております。」

本当に読んでもらえた。それも、年末年始を挟んだ時期である。こんなにも早く結果が届くとは。読んでいただいただけでもありがたい。「作品講評」なるものもあった。教員は、よく「価値づけ」という用語を使う。この作品講評は、私の拙い原稿を価値づけてくれていた。自分でもうまく表現できないでいる自分の文章スタイルや、原稿に一貫して流れているものなどを教えていただいた。プロは違う。作品講評から、その一部を抜粋する。

校長先生が発信する通信と言うと、どうしても硬質なものを想像し身構えがちだが、そんな既成概念が全く覆され、一社会人としての著者そのものがさらされている。全ての文章において、特定の物事や人への批判が一切なく、自分の問題として内面化されていることが感じられる。気楽に読んでいく中で、知らなかった多くのことを教えられ、また著者の生き方や考え方に自然に触れることで、大きな啓発を受ける。日々の通信の積み重ねが、そのまま著者の自分史や思想を語るエッセイになっている所に稀有なものが感じられる。

私には、小学校というチャンネルがあった。そこに中学校というチャンネルが加わった。次に衛星放送ではないが、海外というチャンネルも増えた。学校現場ではないチャンネルもついた。そして、高等学校というチャンネルが加わった。これからは、その度ごとにチャンネルを使い分け、ものを考える際の“ものさし”として、自分が判断する際の根拠や材料としたい（No.３３４）。

２０２１年４月、１０回目の転勤で福島市立野田中学校に赴任した著者の第一声である。毎週出している生徒向けの「校長通信～夢拓く～」、先生向けの「職員室だより『切磋琢磨』」―それらのいわば公的な通信とは別に、この「校長室だより～燦燦～」は「公」の中にある「私」という微妙なバランスの中に成り立っているように見える。「テレビのチャンネルは少ないよりはたくさんあった方がいいだろう。教員人生のチャンネルも一つよりは複数あった方がよいということをこれから証明していきたい」（同）―作品はまさにその証明である。

（次号に続く）